生徒向け校長通信

あうん

教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥

第　４２　号
令和７年２月２８日

私はずっとたのしかったよ。

宮島未奈『成瀬は天下を取りに行く』

中２の夏休みの始まりに、幼馴染の成瀬がまた変なことを言い出した。コロナ禍、閉店を控える西武大津店に毎日通い、中継に映るというのだが……。さらには M-1 に挑み、実験のため坊主頭にし、二百歳まで生きると堂々宣言。今日も全力で我が道を突き進む成瀬から、誰もが目を離せない！　話題沸騰、圧巻のデビュー作。
（新潮社「宮島未奈『成瀬あかりシリーズ』特設サイト」から転載）

僕の三条高校での日々はあと一ヶ月で終わる。５年。校長の５年は長い。2024 年本屋大賞受賞の『成瀬は天下を取りに行く』の成瀬あかり風に言えば「わたしはこの５年を三条高校に捧げようと思う」だった。ちょっと格好つけすぎだな。でも格好つけついでに少し語らせてほしい。
この５年間、先生方と話していたのは「三条高校を挑戦する学校にしよう」ということだった。

――――　生徒も教師も挑戦する学校　――――

僕は胸を張って、そうだったと言いたい。特に明日、卒業する生徒諸君はそうだった。
本校で『探究』を本格的に始めたのは君たちからだった。先生方も手探りながらも挑戦する姿勢を失わなかった。君たちはそれに応えた。おからハンバーグの商品開発。十勝の農業を応援する歌。福祉の現場で使いやすいエプロンの提案など、今振り返っても素晴らしい取組だった。そして探究活動を校内の活動にとどめるのではなく、学校外での活動を認めてほしいと働きかけたのも君たちだった。不登校をサポートをする団体の行事に参加し、新たな気付きを得たメンバーたち。「不登校という問題を否定的に捉えるのではなく、多様な教育の在り方があっていい」「『今』がつらい生徒に対して『未来』を心配する大人や第三者との価値観のズレによりややこしくなっています。不登校に悩む生徒たちを頭ごなしに否定するのではなく、生徒に寄り添いあせらずによい関係性をつくることが大事」と僕に語った君たちにこそ、将来ぜひ教育現場に立ってほしいと心底思ったものだ。他にも帯広畜産大学に出向いてバイオテクノロジーの実験を行った生徒たちもいた。実際、推薦入試で教育大や畜大への進学を決めた生徒もいる。彼らを突き動かすエネルギーが自分たちの進路を自ら切り拓いている。
部活動にしても君たちの挑戦はすごかった。全国の舞台で活躍した部活動はもちろん、それぞれがぞれぞれのところで挑戦を続けていた。その姿勢は頭が下がるほどだった。

さて、『成瀬は天下を取りに行く』の主人公、成瀬あかりも常に挑戦をする。それが常人では理解しがたい挑戦である。「わたしはこの夏を西武に捧げようと思う」と言って、閉店を控える西部に毎日通い、テレビ中継に映ると宣言する。次に「M 1に出場する！」と言いだし、しまいには「200 歳まで生きる」とまで言い切った。彼女の理屈はこうだ。

「やってみないとわからないことはたくさんあるからな」
成瀬はそれで構わないと思っている。たくさん種をまいて、一つでも花が咲けばいい。挑戦した経験は全てこやしになる。

全くその通り。やってみないとわからない。でも、それができないのが普通の人。実際、こんな彼女に付き合わされていく幼なじみの凡人代表、島崎は大変なのだ。でも島崎は最後に成瀬にこう言うのだ。

「私はずっと楽しかったよ」

確かに最初は振り回されていたのかもしれない。でも同じ経験は多分自分一人では絶対にやらないし、やれない。成瀬がいたからやれた。振り回されたといっても最後は自分が選んでしたこと。むしろ、成瀬に会えてよかった、という心境なのだ。

今、振り返ると今の僕は成瀬ではなく、島崎の心境そのものなのだ。色んな挑戦を続ける三条の生徒たちと先生たち。あなた方がいたからこそ経験できた。一緒に過ごした月日はずっと楽しかった。
卒業おめでとう！そして、ありがとう。